



幼児の要求水準と指導

帆 足 喜 与 子

私たちのすべての行動は、結局自分の要求をどのように実現しているか、その実現の仕方なのだと言及することがありますが、要求が直ぐに解決、解消されるのでない場合がたくさんあります。未来において、どれくらいのことを、どんなやり方で、しおおせようかといういろいろ希望することがそれです。

人間は幼いほど現実の生活の中に生きることが多く、成長発達するにつれて、意識の中に未来についての想が重畳いたします。そして、未来についての希望、要求が、その人の人柄を支配する一つの重要な役割をなしていることをおもうと、このような非現実の世界といえどもないがしろにし去ることはできないのです。

要求水準に関して、幼児についての研究は比較的少ないようです。それは、幼児が未来について自ら語り出すことは少ないし、その上未来に関することを彼らからきき出すとしても目前の事物を語るほどには明確な答を得ることがむずかしいための自然の成行であるかもしれません。しかしよく考えてみますと、幼児の教育者にとって、彼らの要求水準についての知識をもつことは大そう大切で

あります。

なぜならば、現実を離れて先のことは、実際のところ、成人が水先案内をつとめることが非常に多いし、それに今述べたように、幼児が四、五才にもなり、たとえ相当に未来のことを考えはじめても、それをうまくききただして理解し処理するという私たちの指導の仕方は訓練を要するものであるからです。成人の案内、指導の仕方が当を得ていると幼児は適確なベースをもって自分らしい道を歩み、自分のなしたことに満足感を覚え、その満足感の積み重なりによって安定した人格の基礎を作ってゆくのですが、そうでない場合は、彼らをいらだたせたり、または投げやりにさせてしまったりという方向に導くことになります。

結論的なことをさきに述べたようになってしまいましたが、ここで、幼児の要求水準について調査実験した資料を紹介し、同時に再び、幼児を教育する者の要求水準の扱い方を考えてみることにいたします。

要求水準（未来の目標）は達成せられると成功感をともない、達

成されなければ失敗感が残ります。成功感と失敗感がそれぞれ三才から四才の幼児にどんな影響を及ぼすかを調べたものがあります。まず幼児の活動性の程度を四段階に分類し、それぞれの幼児をこれを尺度に評定しておきます。彼らが失敗を経験した後、活動的な幼児においては、活動性の程度がもとより三段階も低くなってしまい、逆に消極的なものは活動性が失敗によって増すということです。大体幼児は失敗に対して非常に敏感です。このことは私も幼稚園児に要求水準の実験をおこなってみて経験したことです。男の子でも女の子でも、皆に比べて最も成績のわるいものは、途中でやめたいといい出しました。男の子には、ボール投げをさせながら、一回投げるごとに次の目標を樹てさせていったのですが、最低の距離段階さえも飛ばせない子（この子は知能は優秀です）は球ひろいにまわりたくい何度も申しました。ようやくなだめて、最後まで皆と一しょにやりぬきはいたしましたが、一方一定時間に四角います目に一つずつ出来るだけ多くの丸を描かせる競争においても下手な女の子はざっさとやめてしまいました。しかもこの場合、同じ位の不成績の者も他にあったのですが、自分の要求水準からあまりへだたっていたことが不快を招いたのでしょう。この子もまた、ふだん他の仕事は全般的に優秀であることは考えさせられるところですよ。

成人はある仕事（得意な仕事）には要求水準を高くし、不得手の仕事には要求水準を低くするというふうに、仕事によって調節をすることが一応できますが、幼児は今みたように、仕事によってそういちいちはっきりと要求水準を調節できるようにはなっておりませ

ん。要求水準は自我水準であって、自己の自信のほどや面目はこれにあらわされ、自分がどれだけのことができるかを人を知るのにも役立つことになっております。成人は通常不得手な仕事の故に自我水準がそうひどくゆり動かされることはありませんが、幼児においては一つの不得手な仕事に自我水準に響くのでしょうか。

ファヤンスという人が乳児と幼児について成功と失敗の研究をしたものを見ますと、失敗した時、慰めたり激励したりすると、後の仕事に対して成功を経験したと同程度の効果をもたせることができそうです。すなわち成功したという満足は次に仕事をもっと長時間継続させるものですが、成功に激励を付け加えると、仕事の継続時間ももっと長くなる。失敗は逆に継続時間の低下を招きますが、失敗に慰めとか激励を加えると、一時失敗によって下った継続時間はやがて回復してきます。

幼児には成功、失敗両面にわたって激励のことは非常に必要であると同時に、また不得手なことを得手なことに比し、あまりひんぱんにおこなわせないことが基礎的に健全な明かい自我水準養成のためによいことだと思われま

す。私のボール投げの実験でなおわかったことは次のようなことでした。幼児は相当程度自分の能力を知ることができて、はじめのうちこそぞって最高目標を樹てていたものの、失敗を重ねるにつれ、目標を自己の能力に徐々に近づけてゆきました。しかも他人の出来栄えをうらやましがって自分の要求水準にそのまま移してこようとすることは見られず、むしろ他人にはおかないしに自分の仕事の方に熱中している様子でした。

一つここでおもしろいことを発見したのは、目標を成績よりも低く樹てるということが三人の子に一回ずつ出てきただけで、その他はすべて、自己の能力と同等、あるいはそれより少し高い目標を樹てたことでした。小学校高学年や成人は、自己の成績より相当高い目標をねらいつづけたり、また反対に自己の能力以下の目標を樹てることが多いのですが、とくに低い目標が樹てられなかったことは幼児の精神の健全性を物語るもののように思われました。ボール投げで低い目標を樹てながらある幼児は「低い目標を樹てて、もしそれを越したらおもしろいから」という意味のことを申しました。こういう心の働きは、小学校上級生や、とくに成人には極くしばしば見られるところです。しかし幼児にはそういうのは例外でもつとまともに単純な目標が樹てられており、これは望ましいことにおもわれます。

女の子はボール投げを好まないで、けい紙の一こまごとに丸印を十五秒つづけて描く競争、さらに、一こま一こまを異なった色でぬりつづす競争をさせました。ここでは前のボール投げといささか異なった結果が見られました。ボール投げの場合は、地面に各色のテープを張って距離の段階を示し、したがって被験者の樹てた目標はどの距離を示すものか目で見られるようになっていたわけでした。丸描きの場合には、十五秒間に大体八個から九個、とくに上手な子が十八個描けていたというのが現実であるのに、五十五個という目標が宣言されたり、他にも到達不可能なことがわかつている目標がしばしば見られました。丸印描きなどという日常あまりしたこともない作業は彼らにとって不馴れであり、しかもその目標を数という観

念的なものであらわすことは目標のあいまい動揺をひきおこしたのではないかとおもいます。

しかしそれはそれでいい教えを得ました。すなわち、前のボール投げのように、目標がはっきり視覚にとらえられるようなときには、成人よりもむしろもっと健全な目標の樹て方がされるのに、数観念、しかも十ないし十五以上の数系列を動員しなければならぬような場合には突拍子もない目標がとび出す。幼児にとって目標が眼前にない場合、これをとらえて固定させておくことは困難です。

そんな場合、突拍子もない目標が、突拍子もないものであることを本人自身よく知らないでしょう。むしろ突拍子もない目標は目標に対する不確実感自体を象徴している以外の何ものでもないでしょう。それを彼らがためをいっているのと難じたり一笑に付したりすることなく、不確実感について手当をしてやるべきだと思いません。すなわち自分の能力を認識させ、目標について思い及ぼす段階にないならば強いて目標を樹てさせたりしないこと、成人の手助けによって適当な目標が見出せるならばそれをしてやることがよいとおもいます。

要求水準は、過去の成績よりも少し高いか少し低いかが普通で、成功や失敗に応じた目標を上げ下げするやり方が健全な適応的なやり方だというのが一般の定説です。幼児の場合さきのボール投げの実験で見たように、自分の過去の成績より低いことは稀であることから見ても、やや高い目標を樹てることが健全だと考えてよいとおもいます。

そこで實際生活において、幼稚園では教師が集団を強調しすぎたり、また家庭で親が個々にふざわしくない高い目標を示さないようにしたいとおもいます。幼稚園では、たとえ集団的に事がうまく運ばず調子が乱れても、それは犠牲にしても、個人々々の立場を尊重する方がよいとおもいます。あまりに社会を重んじすぎると、皆と同じようにできない子は集団の流れに流されてしまう。自分のペースを守るいとまがなく、自分の目標がつかめる前に、自分には適切な目標が与えられるのは幼い子どもにたいへんよくないことだと思ふのです。こういう経験が多くなると子どもは形式的になり、調子のよい返事をするを覚えたりいたします。

もっとひんぱんに見られるものに、親が一挙に高い目標を与えてしまうことがあります。そのために子どもが完全に仕事をしなげればならないということにこだわったり、いつも背のび態勢をとるようになってしまう。幼稚園に来ていららるるのです。要求水準をさし示す人がそばにいる時、すなわち家庭にいる時よりも、それから離れたときに、めだつて不安定感がおこるのです。自分の頼る人が高い目標を樹てても、そのもとにいる時は無責任でいられる。親は子どもをいじめるために高い目標を与えるわけではありません。それから、その愛情にげん惑され、また、そういう親に限って子どものごとまで自己の責任としてハリキっていますので、結局のところ子どもは自分のする事について自覚なしに何となく生活してしまふ。ところで一步家の外にでると、家で注入された目標以外何も持たない幼児は、自分にふざわしくないものを背負ってひとりて歩かななくてはならないのです。自分にふざわしい目標にてらして、自分の

力で成功した実感を持たない子は外に出て自信をもつことができないというわけです。また高い目標のために余分に努力をさせられ一応成功はしているような種の子は外に出ると攻撃的になります。

幼稚園の教師はこういう幼児によく遭遇いたします。親を再教育することが大切ですが、幼稚園では、各個人にふざわしい目標を幼児自身が樹てるようにし、成功感を相手に味わわせるようにして心から生活を楽しむ経験をさせることが必要です。さきのボール投げや丸描きで見られたように、幼児はむしろ人まねするほどに人のことは見ておられず自分のことだけに注意を向けるか、そうでなければ自分のことを全く忘れて他人ばかりに見とれるというふうですから、わざわざ誰々さんのようにしなさいと他人をひきあいに出すことは適切ではありません。

要求水準は自己防ぎのためではないかと論じられているほどに、これは現実のものでないだけに正体はたいへん複雑です。実際のところ自分の実力の低さをごまかすために要求水準を高くしてカモフラージュすることもあります。気をつけてみると私たちは自他によつて樹てられたいろいろの要求水準にとりまかれています。中には高いものもあり低いものもある。比較的近い未来に結果があらわれる事柄については確実な要求水準を樹てることが絶対必要です。こんなことを思い出したのは、先年、幼稚園の子どもにキューリー夫人の生いたちを読んでやったとき、ひとりの女の子が「そんな子どもになりたいね」といいました。私はこれをやはりたいへん美しいことばとしてきいたからなのです。

(川村短期大学)